1969.8.7　明治大学新聞

キャンパス・ルポ

五年生卒試を阻止

和田法学部長と確約書

本校　駿河台一帯にまだ人影もまばらな午前八時半、本学全共闘二〇〇人のデモ隊の笛が路上にこだまする。

「法学部五年生卒業試験阻止のためにデモ隊は〝男坂〟から試験予定会場の明治高校へ急行した」しかしそこには「試験中止」の貼り紙と二、三の職員を残すのみ。

法学部事務長をつかまえて聞く「何で試験を中止したんだ」いわく「〝卒試粉砕〟のタテカンが出てたから」。

おさまらない学生側は和田英夫法学部長などと十号館一四〇番教室へ戻り、「法学部教授会弾劾集会」を開いた。

急を聞いてかけつけた教授会約一五人を前に全共闘・法闘委の団交が続く。校舎の外ではタテカン造りとマイクでの〝情宣〟、学生も集ってきた。

過去、再三再四にわたって団交時と何ら変わるところのない〝答弁〟を繰り返す教授会の態度に学生の追及もいささかマンネリ気味である。

相方あわせて百数十人という小規模な団交にもかかわらず、度々紙つぶてが飛ぶ、ヘルメットで机がたたかれる。

学生をこのように激しく興奮させたものは「〝右翼とパルタイ（共産党のこと）〟ばかりと呼称される法学部教授会の現状分析から学生処分に到るまでのすべてを〝法〟によって割り切ろうとするいわば〝悪しき隣人〟的性格によるもの」と学生はつぶやく。

しかも、その〝違法アレルギー〟ともいうべき性格が、学生（全共闘に結集するような）とははじめから相入れないのだという非和解的＝身構えた態度に裏打ちされる時、彼らが金科玉条としている「話し合い」なるものはおよそ実現不可能だろうという見方が強かった。

〝弾劾集会〟は一時すぎ、①二十八日以降の三日間以内に法学部教授会と学生との団交をもつこと②その団交がもたれる以前には卒業試験は一切行なわないこと、③以上が果たされない場合は和田英夫法学部長が辞任すること――の三点を文書で確約し閉会した。

学生側はシュプレヒコール・インター斉唱後、学館中庭までの学内デモンストレーションを行ない解散した。

全共闘は二十二日から生田合宿のため出かけたが、その間本館はガラガラ。留守部隊がわずかに残っていた。また、二十一日、突然旧学生会館（八号館）二階の駿台祭実行委員会室があっという間にとりこわされた。生協の書籍部が移転してきるという。これに対し学苑会は〝抗議〟の警告文を出し工事の中止方を要請している。ほか、諸団体からも抗議の声が上っている。

（H）